原　　著

語りにおける談話標識
― *Magpie Murders*を例に ―

A Study of the Functions of Discourse Markers in the Narrative of *Magpie Murders*

松尾 文子*

Fumiko Matsuo

キーワード：談話標識、語り、話法、自由間接話法

Key words：discourse markers, narrative, speech/narration, free indirect speech

要旨

本稿の目的は、語りにおける談話標識の機能を論じることである。その題材として、Anthony Horowitz によるミステリ小説である*Magpie Murders*を用いる。小説では何を語るかが重要であるのはいうまでもないが、いかに語るかも同様に重要である。談話標識は、いかに語るかに関わる。

本稿の構成は以下のとおりである。Ⅱ．では談話標識とは何かを簡単に説明し、Ⅲ．では話法と語りについて述べる。Ⅳ．では、本稿で取り上げる小説*Magpie Murders*を紹介する。Ⅴ．～Ⅷ．が本論となる。Ⅴ．では談話標識が視点の移行の合図となることを、Ⅵ．では談話標識が語りの流れを乱さないことに貢献することを述べる。Ⅶ．では談話標識が登場人物の思考の合図となることを、Ⅷ．では談話標識が読み手に何らかの情報を想起させる機能を担うことを示す。最後に、Ⅸ．で結論を述べる。

Abstract

A Study of the Functions of Discourse Markers in the Narrative of *Magpie Murders*

The purpose of this study is to examine the functions of discourse markers in a narrative. I will use *Magpie Murders*, which is a mystery written by Anthony Horowitz, in order to explore discourse marker functions. In novels, it goes without saying that what is told is important, but how it is told is also important. The functions of discourse markers are concerned with how a story is told.

This paper is organized as follows. Chapter 2 will cover a brief description of discourse markers. Chapter 3 deals with speech and narrative. Chapter 4 gives an outline of *Magpie Murders*. Chapter 5 ～ 8 are the main parts of this paper. Chapter 5 will show how discourse markers signal shifts in points of view, that is, from whose perspective a story is told. Chapter 6 discusses how discourse markers can contribute to keeping a smooth flow of narrative. Chapter 7 illustrates that discourse markers can be a signal of the conceptualization or inner voice of characters. Chapter 8 shows that discourse markers remind readers of certain information. With discourse markers, readers may be able to guess a character's thought process behind the utterance concerned. Finally, Chapter 9 summarizes the discussion of the functions of discourse markers in a narrative.

* 札幌保健医療大学保健医療学部看護学科　Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo University of Health Sciences

Ⅰ．はじめに

談話標識は話し言葉で用いられることが多く、Ⅱ．で述べるさまざまな機能を担う。中には first(ly), last(ly), moreover, furthermore, thus, hence のように、多くの場合書き言葉で用いられたり、堅い言い方だとされるものもある。本稿では Anthony Horowitz の *Magpie Murders* [1] を例に、書き言葉である小説の語りにおいて談話標識がどのような機能を担い、どのような効果を発揮するかを論じる。

本稿の構成は以下のとおりである。Ⅱ．では談話標識とは何かを簡単に説明し、Ⅲ．では話法と語りについて述べる。Ⅳ．では、本稿で取り上げる小説 *Magpie Murders* を紹介する。Ⅴ．～Ⅷ．が本論となる。Ⅴ．では談話標識が視点の移行の合図となることを、Ⅵ．では談話標識が語りの流れを乱さないことに貢献することを述べる。Ⅶ．では談話標識が登場人物の思考の合図となることを、Ⅷ．では談話標識が読み手に何らかの情報を想起させる機能を担うことを示す。最後に、Ⅳ．で結論を述べる。

Ⅱ．談話標識とは

談話標識は、「聞き手が発話を正しく理解できるように話し手の発話意図を合図する」というコミュニケーション上の役割を担う。その合図には用いられる文脈に応じて、談話の構成に関わるもの、情報の授受に関わるもの、話し手の態度や感情を表明するもの、対人関係に関わるものがある。

①談話構成機能：話し手が談話をどのように組み立てていくのかを合図する。
and, moreover（付加）、actually, in fact（強化）、but, actually（逆接）、so, then（論理的・推論的結果・結論）、now, by the way（話題転換）、anyway, so（話題回帰）、etc.

②情報授受・交換機能：話し手が情報を受け取ったことや、情報を聞き手と共有したいかなどを合図する。
oh（興味深く重要な情報を受け取った）、actually（予想外の情報を伝える）、you know（情報の共有を望む）、etc.

③態度・感情表明機能：話し手がこれからどのようなスタンスで陳述するのかを合図する。
frankly（発話態度）、actually（驚き）、well（ためらい）、etc.

④対人関係調整機能：会話を円滑に進めるために、話し手と聞き手の人間関係を調整する。
actually, well, etc.

なお、談話標識の詳細については松尾・廣瀬・西川（2015）[2] を参照されたい。

Ⅲ．話法と語り

本稿で論じる事柄と深い関係のある話法（speech/narration）と、小説の語りについて簡単に述べる。

話法とは、他人のことばを語り手の談話に導入する手段である。語り手自身の過去の発話を伝えることもあるし、発話ではなく思考を伝える場合もある。（注１）形式的な特徴の観点（直接的な引用か間接的な引用か・伝達節と共起するか）から、話法を４つのタイプに分類できる。（注２）

	伝達節あり	伝達節なし
直接引用	直接話法	自由直接話法
間接引用	間接話法	自由間接話法

それぞれの例文をあげる。

直接話法：Michihiko said, “Oh, I hate you!”
間接話法：Michihiko said（that）he hated her.
自由直接話法：Oh, I hate you!
自由間接話法：Oh, he hated her!

（山口　2009:39）[3]

この中で、小説における語りで多用される自由間接話法について述べる。（注３）自由間接話法の特徴は、おおむね以下のようにまとめられる。（McHale（1978）[4]，Banfield（1973）[5]

(1993)[6], Leech and Short(2007:260-268)[7], Asher and Simpson（1994：4296-4301)[8], 山口（2009)[3] などを参考に）

①伝達節を伴わない
②間接話法的な要素：人称や時制
③直接話法的な要素
⑴ 疑問文・感嘆文・付加疑問文の構造
⑵ 時や場所を表す副詞（句）や指示代名詞〈直示的表現〉
⑶ 呼格
⑷ 間投詞
⑸ 評価を表す表現：poor, dear, damned, etc.
⑹ 談話標識：yes, no, well, of course, after all, anyway, so, surely, etc.（注４）

このうち⑶⑷⑸は、McHalle（1978：264)[4] のいう colloquial, emotive な要素である。

次に小説の語りに関して述べる。小説の語りには３人称の語りと１人称の語りがある。３人称の語りには、語り手が物語世界のすべてに精通している全知の語りや、１人、あるいは複数の人物に視点を置いてその心の内を描き出す語りなどがある。１人称の語りには、語り手が物語の外にいる場合と、その中の登場人物である場合がある（沖田・堀田・稲木　2018：51-53)。[9]本稿で取り上げる *Magpie Murders* では、第一部が３人称の語り、第二部が１人称の語りとなっている。語り手Ｉは登場人物としての自分自身、いわば過去のＩを物語の主人公にしている。

Ⅳ．*Magpie Murders* について

Magpie Murders は、イギリスの作家 Anthony Horowitz によるミステリ小説である。この小説は二部構成になっている。前半は、Alan Conway という作家が書いた小説の *Magpie Murders* である。（Horowitz 作のこの小説全体のタイトルと同じになっている。）探偵 Atticus Pünd が Somerset 州の Saxoby-on-Avon にある Pye Hall（パイ屋敷）で起こった２つの殺人事件を解決すべく活躍する物語で、３人称の語りになっている。２つの殺人事件とは、Pye 屋敷で家政婦として働いていた Mary Blakiston 殺し、続いて起こった Pye 屋敷の家主で準男爵の Sir Magnus Pye 殺しである。*Magpie Murders* は人気の Atticus Pünd の第９作目という設定である。後半は、世界的なベストセラーである探偵 Atticus Pünd シリーズの担当編集者で、Cloverleaf Books に勤務する Susan Ryeland が主人公で、同時に彼女自身が語り手でもある１人称の語りである。彼女が担当していた Alan Conway が何者かによって殺される事件が起こる。犯人捜しの過程で、出版業界やメディア業界の内幕などが描かれる。このように、この小説では Conway 作のミステリ小説内の殺人と、現実世界での Conway 殺しが扱われていることになる。

Magpie Murders の引用箇所の表示は、以下のとおりである。“p.17”と記した場合は第一部のページ数、“p.2/17”と記した場合は第二部のページ数とする。

Ⅴ．視点の移行の合図

この章では、語り手と登場人物のいずれの視点から語りを行っているかに関わる談話標識の使用について述べる。

まず、so の例をあげる。第二部の冒頭である。語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland で、Alan Conway を担当し、探偵 Atticus Pünd シリーズを手掛けている。登場人物Ｉは語り手と同一人物で、いわば語り手の過去のＩである。登場人物Ｉは、シリーズ９作目で Conway の遺作となった *Magpie Murders* の原稿（Horowitz作のミステリの第一部にあたる）を読み終えたところである。どうやら結末部分が欠けているらしく、殺人事件の犯人が誰なのか分からない。

⑴　Annoying, isn't it ?

I got to the end of the manuscript on Sunday afternoon and rang Charles Clover immediately. ［略］

“Charles ?” I said. “What happened to the last chapter ? What exactly is the point of giving me a whodunnit to read when it doesn't actually say who did it ? Can you call me back ?”

I went down to the kitchen. ［略］I knew that Alan Conway had wanted to end the series for a while but it had still come as an unpleasant surprise to find that he had done exactly that. ［略］

So who killed Sir Magnus Pye ?

I had nothing better to do so I drew out a pad of paper and a pen and sat down in the kitchen with the typescript beside me.—p.2/4-2/5（（犯人が分からないままなんて）ほんとうに苛立たしいわよね。日曜の午後、原稿の最後までたどり着くと、私はすぐさま（上司の）チャールズ・クローバーに電話をかけた。［略］「チャールズ？最後の章はどうなったの？誰が犯人か分からないようになってるのに、そんな推理小説を読ませて、どうしたいの？折り返し電話をくれるかしら？」私はキッチンに降りて行った。［略］アラン・コンウェイが少し前からこのシリーズを終わらせたがっていることは知っていた。しかし、（脳腫瘍を宣告されたこともあり）彼がほんとうに終わらせたと知るのはやはり、面白くない驚きだった。［略］で、誰がサー・マグナス・パイを殺したの？私はほかにすることを思いつかず、メモ帳とペンを取り出してきて、キッチンで傍らに原稿を置いて腰かけた。）

波線部の付加疑問文は自由直接話法で、登場人物Ｉの視点で、小説の結末部分の原稿が欠けていて殺人犯が分からないことに対する苛立ちが表されている。冒頭で自由直接話法を用いることで、登場人物Ｉの声が前面に出てきて彼女の心の内に焦点が当たり、読者を一気に物語に引き込む。読み手は、登場人物Ｉの心内発話を聞いているかのような心持になる。続いて語り手Ｉの視点で登場人物Ｉの行動や思考が述べられる。

次に本題を導入する機能をもつ談話標識 so に導かれて（松尾・廣瀬・西川 2015：206-208）[2]、自由直接話法で登場人物Ｉの思考が表されている。冒頭の “Annoying, isn't it ?” に続く部分だといえる。冒頭の登場人物Ｉの視点から語り手Ｉの視点に移行し、so の部分で再び登場人物Ｉの視点に戻り、その後続部で再度、語り手Ｉの視点に移行する。視点の移行を示すと、（ａ）登場人物Ｉの視点→（ｂ）語り手Ｉの視点→（ｃ）登場人物Ｉの視点→（ｄ）語り手Ｉの視点となり、（ｃ）で so が用いられている。この１人称の語りでは、語り手Ｉが過去のＩである登場人物の思考や行動、心理状態を述べるため、語り手と登場人物のいずれの視点で記述しているか区別がつきにくい。このことが、読み手に小説の世界を疑似体験させるのに有効である。しかし、この下線部では疑問文の語順が保持されていることと、話し手の思考を表す直接話法的な要素である so に導かれていることで、登場人物Ｉの心内発話であることが分かる。

次に、anyway の例をあげる。語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland で、登場人物Ｉは語り手と同一人物で過去のＩである。先行部ではまず、語り手Ｉが “I had nothing to do so I drew out a pad of paper and a pen and sat down in the kitchen with the typescript beside me.”（私はほかにすることが思い浮かばず、メモ帳とペンを出してきて台所で傍らに原稿を置いて腰かけた。）と登場人物Ｉの行動を述べる。続いて Alan Conway の小説における Sir Magnus と Mary Blakiston 殺しの犯人に関する登場人物Ｉの思考（誰が犯人なのか）が約５ページにわたって展開される。その部分が終了し、ふたたび登場人物Ｉの行動が述べられる。

⑵　Anyway, that was how I spent Sunday afternoon, leafing through the manuscript, making notes and really getting nowhere.…—p.2/10（とにもかくにも、原稿をめくり、メモを取り、それでも結論にたどり着けないままで日曜の午後を過ごした。…）

anyway には中心的機能として先行談話の流れを断ち切る機能がある（松尾・廣瀬・西川 2015：13-16）[2)]。ここでは、犯人は誰なのかとあれこれ考えた登場人物 I の思考の記述から語り手 I による現実世界の記述（登場人物 I の行動の記述）へと戻る視点の移行の合図となっている。すなわち、登場人物 I の思考の記述をそこで断ち切っているのである。

最後に in the end の例をあげる。語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland である。先行部分では Alan Conway 殺しの 7 人の容疑者に関する登場人物 I の思考が示されている。この章では考えられる最後の容疑者である Alan の息子の Frederick Conway に関して述べられる。以下はその続きである。

⑶　*In the end* I shoved my notepad aside and went for a meeting with one of our copy editors. …—p.2/189（結局、私はメモ帳を脇に押しのけ、校正係の 1 人と打ち合わせをするために出かけた。…）

in the endは、思慮を重ねたのち最終的にどうなったかを示す機能を持つ（松尾・廣瀬・西川 2015：128-129）[2)]。ここでは、Alan 殺しの犯人に関していろいろと考えたが結局は分からず、メモ帳を脇に押しやって、校正者の 1 人との打ち合わせに向かったことをいう箇所で in the end が用いられている。通常の場合は、in the end の後続部で、重ねた思慮の結果どのような結論に達したかが述べられる。しかしここでは、Alan 殺しの犯人についてあれこれ考えたが結論が出ず、結局「メモ帳を脇に押しのけ、校正係の 1 人と打ち合わせをするために出かける」という行動をとったと述べられている。in the end がそれまでの登場人物 I の思考の記述から語り手 I による現実世界の記述（登場人物 I の行動）への転換の合図となっているのである。

自由間接話法は地の文の語りに登場人物の思考が入り込む形になるうえに、この小説の 1 人称の語りでは、語り手と登場人物が実質上同一人物になっている。したがって、語り手が登場人物ではない場合と比べて、語り手 I と登場人物 I のいずれの声、すなわちいずれの視点・立場で情報が提示されているかの区別がより困難になっている。しかし、⑴ では談話標識があることで、当該部分が登場人物 I の思考であることが明らかになり、視点が語り手から登場人物に移行する合図となる。また ⑵ ⑶ では、語り手と登場人物が同一人物である語りにおいて、談話標識によって登場人物の思考の記述から語り手による現実世界の記述へと転換することが合図され、その結果、語り全体の構造が明確化される。

Ⅵ．語りの流れを乱さない

この章では、談話標識が全体の流れを保ちつつ語りを進めるさいに効果を発揮することを by the way を例に考察する。

次例の語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland で、登場人物 I は語り手と同一人物で過去の I である。ギリシャ人の恋人 Andreas が祖国のお土産を携えて Susan を訪ねてきた。この部分は、その状況の描写で始まる。

⑷　The doorbell rang.

Andreas had telephoned me an hour before and there he was on my doorstep with a bunch of flowers and a bulging supermarket bag that would contain Cretan olives, wonderful thyme honey, oil, wine, cheese, and mountain tea. It wasn't just that he was generous. He had a real love of his country and everything it produced.

It's very Greek. The endlessly protracted financial crisis of this summer and the year before might have dropped out of the British newspapers—how many times can you predict the total collapse of a country ? —but he had told me how much it was still hurting at home. Business was down. The tourists were staying away. It was as if the more he brought me, the more he would convince me that everything was going to be all right. It was sweet and old-fashioned of him to ring the bell, *by the way.* He had his own key.—p.2-70（呼び鈴が鳴った。アンドレアスは 1 時間前に電話してきて、今は花束と膨れ上がったスーパーの袋を持って戸口に立っていた。袋の中には、クレタ島のオリーブ、上等なタイムのハチミツ、オイル、ワイン、チーズにマウンテン・ハーブティーが入っているのだろう。山ほどのお土産を持ってきたのは、彼が気前がよいという理由からだけではなかった。祖国と祖国の生産物すべてを愛してやまないからだった。いかにもギリシャ人らしいではないか。この夏と前年のいつ果てるとも分からない長引く経済不況は、イギリスの新聞では報じられていなかったかもしれない。—ギリシャが完全に崩壊してしまうことを、みなさんは何度予測できるだろうか？—紙面をにぎわしていないとはいえ、経済不況の報道のせいで祖国は今でもどれほど苦しんでいることかと彼は語った。景気は悪化、観光客の足は遠のいてた。お土産をたっぷり持ってくればくるほど、すべてがうまくいっていると私をさらに納得させようとしているかのようだった。ついでに言うと、呼び鈴を鳴らすなんて、かわいらしく昔気質な彼らしいことだわ。合鍵を持っているのに。）

Andreas は、経済危機にあることを報道されるせいでギリシャが困っていると話す。この語りの途中で、語り手 I が読者に波線部の “how many times can you predict the total collapse of a country ?”（ギリシャが完全に崩壊してしまうことを［読者のみなさんは］何度予測できるだろうか［＝何度でも予測できるだろう］）との問いかけが挿入される。次に語りに戻り、Andreas がお土産をたっぷり持ってきたことに関して、お土産をたくさん持ってくればくるほど、Susan にギリシャは全てがうまくいっていると思わせることができるかのような態度で、いかにも祖国を愛してやまないギリシャ人らしいと述べられる。

続いて、下線部で先行部とは関係のない脇道に逸れた情報が導入される。そのことは by the way によって示されるが（松尾・廣瀬・西川 2015：135-141）[2]、仮に by the way がなければ先行部とはつながりのない情報が唐突に提示されることになる。by the way によって、語りの流れを保つことが可能になる。また、by the way が文頭で用いられると、いっそう急に話題が転換された印象になり、語りの流れの滑らかさに欠ける。さらに、by the way によって語りの中で下線部はaside（傍白）的な響きをもち、語り手 I の声に登場人物 I の声が重なっているように感じられる。

次も by the way の例である。⑷ と同じく語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland で、登場人物 I は語り手と同一人物で過去の I である。Susan と恋人の Andreas がギリシャ料理店で食事をする場面である。

⑸ It was Andreas who raised the subject of Alan's death. He had read about it in the newspapers and he was concerned about what it would mean for me. “Will it hurt the company ?” he asked. He spoke perfect English, *by the way*. His mother was English and he had been brought up bilingual. I told him about the missing chapters and, after that, quite naturally, the rest of it came out too.—p.2/72（アランの死の話題を持ち出したのは、アンドレアスだった。新聞で読んで、私にどう影響するかを心配していた。「会社

にとって損害なのかい？」と彼は尋ねた。ちなみに、彼は完璧な英語を話した。母親はイギリス人で、バイリンガルで育ってきたのだ。私は彼に消えた結末部分の原稿のことを話し、それからごく当然のことだが、それに関連することをすっかり話した。）

まず、語り手Ｉの視点で状況が描写され、続いて「（アランの死は）会社には打撃なのかい？」と直接話法で Andreas の発話が提示される。続く下線部では先行部とは内容的に関係のない情報が導入されるが、by the way によって本筋ではない内容を思いついて述べることが示され、語りの流れを保ったうえで後続部で語り手の視点での状況描写に戻る。

Ⅶ. 登場人物の思考の合図

この章では、自由間接話法や自由直接話法で登場人物の思考を提示するさいに、話し言葉で多用される談話標識の well が有効に働くことを示す。

次例の語り手は Alan Conway の小説の語り手、登場人物は Clarissa Pye で、Pye 屋敷の家主 Sir Magnus Pye の双子の妹である。彼女は、殺された Pye 屋敷の家政婦 Mary Blakiston の葬儀に参列しようとしている。地の文で語り手の視点で Clarissa に関する記述がなされる。彼女は頭からつま先まで黒でそろえて、廊下にある全身が映る鏡で自分の姿を確認する。古着屋で衝動買いしてしまった帽子を手に考える。その帽子にはベールと羽根が３本ついていて、いささか装飾過剰なものだった。

⑹ She wanted to look her best for the funeral. The whole village would be there and she had invited to coffee and soft drinks afterwards at the Queen's Arms. With or without ? Carefully, she removed it and laid it on the hall table.

Her hair was too dark. She'd had it cut especially and although René had done his usual excellent work, that new colourist of his had definitely let the place down. She looked ridiculous, like something off the cover of *Home Chat. Well,* that decided it, then. She would just have to wear the hat. She took out a tube of lipstick and carefully applied it to her lips.—p.28（彼女は、葬儀にふさわしい格好をしているように見せたかった。村中の人たちが参列するだろうし、葬儀の後に “女王の腕” である飲み物の会に招待されていた。帽子をかぶった方がいいの？それとも、かぶらない方がいいの？慎重な手つきで彼女は（飾りが多くついた）帽子を脱ぎ、廊下のテーブルに置いた。彼女の髪は黒すぎた。葬儀に合わせて特別に髪を切って、（美容師の）ルネがいつものようにすばらしい仕事をしてくれたのに、あの新入りの染髪係がぶちこわしてしまった。彼女は滑稽な姿に見えた。まるで（主婦向けの雑誌）『ホーム・チャット』の表紙から抜け出したかのようだった。まあ、それなら、こうするしかないわね。帽子をかぶるしかなさそうだわ。口紅を取り出し、丁寧に唇に塗った。）

波線部は Clarissa の思考である。続いて地の文で Clarissa の記述がなされ、下線部では再び彼女の思考が表される。この部分は、波線部の問に対する答になっている。well は話し言葉で多用される談話標識で、話し手がこれから何を言おうか思案中であることを示す（松尾・廣瀬・西川　2015：260-264）[2)]。well は地の文から自由間接話法に変わる合図となり、読者は Clarissa が鏡に映る自分の姿を眺めていろいろと思案したあげく、帽子をかぶることに決めたと推測できる。

次例の語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland で、登場人物Ｉは語り手と同一人物で、いわば過去のＩである。登場人物Ｉは亡くなったAlanの自宅を訪問して書斎に入る。書斎の描写の後、以下のように続く。

⑺　I was interested in the room. It seemed to me that it was as close as I would get to walking into Alan Conway's head. And what did it tell me ? *Well,* he wasn't out to hide his light. All his awards were on display.―p.2/38（私はその部屋に興味をもった。アラン・コンウェイの頭の中に入って行くかのようだった。で、この部屋から何が分かるのだろう？そう、彼は自分の栄光を隠そうとはしないということだ。受賞時にもらったものはすべて飾られていた。）

波線部の自由間接話法で登場人物Ｉの思考が示され、続いて下線部でそれに対する答（登場人物Ｉの思考）が示される。well があることで、登場人物Ｉが Alan Conway の書斎を見渡すようすを読者が思い浮かべることができ、さらに目にしたものから登場人物Ｉが結果導き出した答が下線部で示されていることが推測できる。

次例の語り手も ⑺ と同じである。Susan は *Magpie Murders* を初めて読んだときから、Sir Magnus Pye や Pye Hall という名前が子どもじみているし古めかしいと考えて、Alan に話をしてみようと考えていた。しかし読み返してみると、脇役にいたるまである方針に基づいて名づけられていることに気づいた。地の文で、登場人物の名前のほとんどすべてが鳥の名前に由来することが述べられる。その後続部である。

⑻　Does it matter ? *Well,* yes, actually. It worried me.―p.2-146（それが大切なことかって？いや、大切なのだ、実は。私は不安になった。）

波線部の自由直接話法で登場人物Ｉの思考が提示され、後続の下線部でそれに対する答が示される。登場人物Ｉの自問自答の形になっている。yes も登場人物Ｉの言葉で、談話標識の actually が先行部の “yes” を強化している。

いずれの例でも、well を用いることで当該の部分が登場人物の声が聞こえてくる心内発話であるかのような印象を読者に与えることができる。

Ⅷ．談話標識で読者に想起させる情報

談話標識は先行発話と後続発話のさまざまな関係を表し、聞き手（読み手）が当該の発話をどのように解釈すべきかの手掛かりになる。この章では、談話標識によって読者に先行文脈を想起させる例を見る。

まず、語りの地の文や登場人物の思考を表す自由間接話法の部分ではないが、章の冒頭で談話標識を用いることにより得られる効果について述べる。次例は、Joy Sanderling という女性が探偵 Atticus Pünd に対して発する言葉である。Joy の婚約者は、Pye 屋敷で彼の母親 Mary が殺された事件の犯人だと村で噂されている。Pye 屋敷は Mary の奉公先である。Joy は探偵の Pünd に婚約者の疑いを晴らすことを依頼する。彼女は村のバス待合所の隣の掲示板に、「婚約者は無実なので、悪意のある噂を立てるのはやめてほしい」という旨の声明文を貼った。しかし、前章の最後に “Joy Sanderling's confession had been removed.”（ジョイ・サンダーリングの告白文は剥がされていた。）とある。それを受けての次の章の冒頭である。Joy は次のように言う。

⑼　*“Actually,* I took it down myself. I did it this morning. I don't regret putting it there. …”―p.157（「実をいうと、私が剥がしたんです。今朝のことです。貼ったことは後悔してません。…」）

この actually は、聞き手の予想とは異なることを述べる合図となっている（松尾・廣瀬・西川 2015：2-4）[2)]。actually があることで、直前に「声明文を見かけなかったがどうなったのだろうか」というような Pünd の発話があったことが暗示される。さらに、「Pünd は私以外の

誰かが剥がしたと思っている」と Joy が考えていることも示される。actually によって、この小説上では実際に発せられなかった Pünd のことばと Joy の思考を読者に想定させることができる。

次は in fact の例である。語り手は出版社に勤務する編集者の Susan Ryeland で、Alan Conway を担当している。登場人物 I は語り手と同一人物で、過去の I である。Susan は上司の Charles とともに Alan Conway の葬儀に向かう。その車中での会話である。Charles は Alan が考えた *Magpie Murders* という小説の題名が気に入らず、Alan の存命中に変更することを提案したが、Alan はひどく怒って断った。一方登場人物 I は、レストランでその時の様子を目撃した Mathew Prichard という人物から題名をめぐってもめる Alan と Charles のことをすでに聞いていた。

⑽ I reminded him of what Alan had said, the four words he had spoken just before the waiter had dropped the plates. *I'm not having the* — Did he know what Alan had been about to say ?

"No. I can't remember, Susan. I have no idea."

"Did you know that he thought up the title years ago ? "

"I didn't. How do you know ? "

In fact Mathew Prichard had overheard Alan telling him exactly that. "I think he mentioned it to me once," I said.—p.2/98（私は、アランが言ったことを覚えているか彼に尋ねた。ウェイターが皿を落とす直前にアランが口にした 4 つの言葉を。私はするつもりはないぞ、そんな—。アランが何を言おうとしていたのか予測がつくのか、と。「いや、覚えてないな、スーザン。まったく分からない」「彼が *Magpie Murders* という題名を何年も前に思いついたことは知ってたのですか？」「いや。きみはどうして知ってるんだい？」繰り返すが、マシュー・プリチャードがアランが彼にそう言ったのを偶然耳にしていたのだ。（でも、その話を聞いたことは言わずにおこう。）「以前、アランが私にそう言ったのだと思います」と私は答えた。）

斜体字部で Alan のレストランでのことばが自由直接話法で提示されている。Mathew は、Alan の "I'm not having the—" に続くことばは聞き取れなかった。続く波線部では、登場人物 I が Charles に尋ねた "Do you know what Alan was about to say ?" という発話が自由間接話法で提示されている。その後、直接話法で登場人物 I と Charles のやり取りが提示される。ひとつ前の章では、Mathew Prichard がレストランで小耳にはさんだ *Magpie Murders* という題名は何年も前から決めていたという Alan のことばや、Alan と Charles がもめている様子を登場人物 I が Mathew から聞いたことが述べられている。したがって、読者は Alan から直接聞いたと思うという登場人物 I の答が正しくないことを知っている。

では、なぜこの位置に in fact に導かれる下線部の情報が挿入されているのだろうか。下線部がなくても、登場人物 I と Charles のやり取りは成立する。また、登場人物 I が小説の題名をめぐる話を Mathew から聞いていたという前の章の情報がなければ、Mathew という人物が突然出てきて、下線部とそれに後続する登場人物 I の答のつながりを見出すことはできない。仮に、下線部が登場人物 I の答 "I think he mentioned it me once," の後続部にあるとすれば、in fact によって前述の内容（登場人物 I は Alan から直接聞いた）に反する情報（登場人物 I は Mathew から聞いた）が導入されることになる。この場合、in fact を but in fact にすることができる。しかしここでは、Susan の答の先行部に下線部の情報が挿入されている。in fact で何かが強調される（松尾・廣瀬・西川 2015：142-146）[2]。ここでは、前の章で述べられた Mathew から得た AlanとCharles のやり

取りに関する情報を読者に思い起こさせ、確認している。その流れからすると、登場人物Ｉは Mathew から聞いたと答えると予想されるが、Alan から聞いたと答える。ここで読者は予想を裏切られる。「でも、マシューから聞いたことは言わずにおこう」という登場人物Ｉの心の動きを読み取ることができるのである。

Ⅸ．おわりに

談話標識が語り手から登場人物へ、登場人物から語り手へと語りの視点が移行する合図となることがある。また by the way の例で示したように、談話標識は語りの流れを乱さずに語りを進めるのに寄与することがある。さらに well の例で示したように、談話標識が登場人物の思考の合図となり、読者が登場人物の心内発話を聞いているかのような印象を与える効果が見られる。最後に、談話標識によって小説では具体的に言語化されていない情報を読者に想起させたり、先行部で提示された情報と関わって登場人物の心の動きを読者に推測させる機能があることを述べた。

小説では物語の内容や筋立て、登場人物のキャラクターが重要であるのはいうまでもないが、物語をいかに語るかも同様に重要である。登場人物や語り手の発話意図を明確にすることに寄与する談話標識の使われ方を理解することで、書き手による物語の語り方を読み解くことができる。談話標識は、いかに語るかに関わるのである。

注

1．Leech and Short（2007：270-281）[7] は、他者の発話を引用する方法として、本稿で挙げた４種類の話法の他に、発話行為の報告（narrative report of speech act）を加えた５種類を挙げる。また、発話の引用とは別に思考の引用を設定している。話法にならい、direct/indirect/free indirect/free direct thought と、思考行為の語り手による伝達（narrative report of a thought act）の５種類に分類する。

また、Declerck（1991：520-527）[10] も、speechの区分を thought の区分にも当てはめている。さらに、Huddleston and Pullum（2002）[11] も、描出話法（reported speech）には spoken and written text のみならず、unspoken thoughts も含むとする。

2．山口(2009:1-4)[3]は､引用と話法について、以下のように述べている。引用とは、他人のことばをそれと分かるように自分のことばに取り込む行為である。話法とは、引用を行うために文法化された言語手段である。多くの言語が引用を行うための文法規則を持っている。英語も日本語も、引用のために文法化されたオプションを複数持っており、そのオプションの使い分けに他者のことばに対する話し手の接し方が表れる。つまり、引用という行為は普遍的な現象であり、話法は個別言語がそれぞれの体系に見合ったかたちで文法化したものである（山口 2012：6)。[12]

山口（2009）[3] では、「最初にディスコースありき」という立場に立つ。対話はコミュニケーションのもっとも基本的な場で、構造の上でも基本的な形態といえる。対話から口頭の語りへ、さらには書かれた語りへとコンテクストは特殊化する（p.85)。

3．自由間接話法は描出話法とも呼ばれるが、本稿では自由間接話法という呼び名を使う。

4．これらの表現は、McHalle（1978：269）[4] では lexical filler と称される。

参考文献

1）Horowitz, A. *Magpie Murders*. Orion, 2016.

2）松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美編著．英語談話標識用法辞典　43のディスコースマーカー．研究社，2009, 377p.

3）山口治彦．明晰な引用、しなやかな引用：話法の日英対照研究．くろしお出版，2009.

4）McHale, B. ‘Free indirect discourse：A survey of recent accounts.’ *A Journal for Descriptive Poetics and Theory of Literature.* 1978, 3, 17-45.
5）Banfield, A. ‘Narrative style and grammar of direct and indirect speech.’ *Foundations of Language.* 1973, 10, 1-39.
6）Banfield, A. ‘Where epistemology, style, and grammar meet literary history：the development of represented speech and thought.’ *Reflexive Language：Reported Speech and Metapragmatics.* Lucy, J. A. and Lucy, L. A.（eds.）Cambridge University Press. 1993, 338-364.
7）Leech, G. and Short, M. *Style in Fiction：A Linguistic Introduction to English Fictional Prose.* Routledge, 2007[2].
8）Asher, R. E. and Simpson, J. M. Y. *The Encyclopedia of Language and Linguistics.* Pergamon, 1994.
9）沖田知子・堀田知子・稲木昭子．ことばのインテリジェンス：トリックとレトリック．開拓社，2018.
10）Declerck, R. *A. Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Kaitakusha, 1991.
11）Huddleston, R. and Pullum, G. K. *The Cambridge Grammar of English Language.* Cambridge University Press, 2002.
12）山口治彦．“語法研究としみったれの原理―前提を減らして眺める引用表現の姿”．英語語法文法研究．英語語法文法学会，2012, 19, 5-19.